

研究ノート

20世紀初め太平洋を越えたガールスカウトと 日本社会のアメリカ化

藤 本 茂 生

序論

本稿は、環太平洋的な観点から、戦間期における日米の青少年運動について新たな像を提示するものである。20世紀前半のガールスカウト運動に関する研究史について、アメリカでのスカウト史研究は、国内の事象に多くの関心を当て海外での出来事にはほとんど関心を払わず、また日本での同運動の場合、研究はイギリスのガールスカウトとの関係に限定されてきた（藤本、『ボーイスカウトとガールスカウト運動の誕生』、別冊1-2）。しかし、最近に出版された著作『スカウト史研究の最前線』（*Scouting Frontiers: Youth and the Scout Movement's First Century*）は、その序論において、ローカルあるいはナショナルな文脈の圏外からこの青少年運動を理解する研究しかなされなかったことを指摘して、グローバルな背景のなかでスカウト運動を分析する必要性を説いている（Nelson and Proctor viii）。

上記の研究史を踏まえて、本稿は、結論を先じて言えば、日本におけるガールスカウト運動の草創期の歴史が、日本社会のアメリカ化の中の一事象として理解できると論じるものである。筆者は、同様のテーマに関して、“Transpacific Boy Scouts Movement in the Early 20th Century: The Case of the Boy Scouts Organization in Osaka, Japan”と“Early 20th-Century Americanization and the Boy Scouts Movement in East Asia”と題した二つの論考を既に発表している。第一は、20世紀初め日本のアメリカ化の時期における日米ボーイスカウトの関係性の歴史についてであり、第二は、東

アジアというリージョナルな文脈を設定し、この地域でのボーイスカウト運動とアメリカのボーイスカウト運動との関係について論じた。本稿は、これらの論考に対応する日米ガールスカウトを同様の視点から論じるものである。

I

ボーイスカウトとガールスカウト（イギリスではガールガイド）は、ともに20世紀初めイギリスで開始された青少年運動であり、その後すぐに世界規模での青少年運動に発展した。

両運動とも、学校教育とは異なる学習プログラムを実施した。それは、野外での活動に強調点をおくもので、キャンプ、森林生活、ハイキング、これに加えて社会奉仕活動が含まれた。しかし、ガールスカウトがボーイスカウトと異なる点は、発足当初から明白であった。両運動の創始者ロバート・ベーデン・パウエル（Robert Baden-Powell）は、19世紀ヴィクトリア朝時代に育ち、人生の大半を軍隊で過ごした人物であり、このような経験から、ボーイスカウトに「少年らしさ」と将来のイギリス帝国の良き市民、兵士となることを求めたのと対照的に、ガールガイドには、「少女らしさ」と将来の帝国の良き妻、母像を描いた。「ボーイスカウトの訓練を … 全ての少女に応用しようとすることは … 不可能である。少女の場合には、まったく異なった方法で運営されなくてはならない。洗練された少女たちをおてんば娘（tomboys）にしたくはないし、その一方で、スラムの少女をすさんだ生活からより良い方向に導きたいとも思う。重要な目的、すべての少女が良き母になり、次世代をガイドする（導く）力量を身に付けさせること」であった。そして、当初は運動の対象を労働者階級の少女たちに絞ったが、これが中産階級の少年たちをターゲットにしたボーイスカウト運動との最大の相違であった（矢口 32；井野瀬 234）。

確かに、ガールガイドの初期の訓練と組織は、ボーイスカウトを下敷きにしたものであり、それと同様の活動が大部分を占めている。しかし、看護、保育、裁縫などの少年向けとは異なる内容が含まれ、また、1910年代までは、少女のキャンプについての異論も存在し、明確に位置づけられておらず、これらの点では、「少女のための組織が母性を軸としていた」ことは明らかである。ボーイスカウトとの違いが名称へのこだわりにもみられ、パトロール隊の命名において、ボーイスカウトの「狼」・「狐」・「ヤマネコ」に対し、「バラ」・「矢車草」などの花の名前が用いられた(矢口 35)。

バーデン-パウエルは、男女を区別することを前提に少女たちの組織化を考え、女性による指導者として妹のアグネスにその代表を依頼した。ガールガイドの最初のチーフ・ガイドとなったアグネス (Agnes Baden-Powell) は、兄と同様に「女は女らしく」というヴィクトリア朝的な価値観の持ち主であったが、少女たちからはキャンプ活動を初めとして少年たちと同じ活動を望む意見も存在した。しかし、アグネスのもとでは、ガールガイドはボーイスカウトのモデルに従うべきではなく、料理や看護など「女性的な」活動を行うべきであるとされるようになった。ガールガイドの計画は1909年にスカウト本部の機関紙において発表され、バーデン-パウエルはアグネスとともに、『ガールガイドのハンドブック—少女たちは如何にイギリス帝国の強化に貢献できるか』(*The Handbook for Girl Guides or How Girls Can Help Build the Empire*)を1912年に発刊した(藤本 5-6)。

上記のイギリスのガールスカウト運動を受け入れた日本では、1921年に「東京女子補導団」が、イギリスのガールガイド組織に所属するイギリス国教会の女性宣教師たちによって設立された。同年発刊のイギリスのガールガイド組織のニューズレター『ザ・ガイド』(*The Guide*)には次のように記されている。

E. M. Greenstreet, Sec. for Girl Guides in Japan, wrote an essay

titled “The First Rally of Japanese Guides in Tokio,” mentioning the day of its establishment. . . . Saturday, May 7, 1921 was a wonderful day for the Japanese Girl Guides, for they “came out” on that day. How we looked forward to it! What joyful and careful preparations were made! We were shy! Yes, very shy, for we were only a year old, and on May 7, we were to appear for the first time in public, as witnesses and examples of the Movement well-known amongst the foreigners, but new to the Japanese. (*The Guide*, August 6, 1921: 248)

翌1922年の同機関誌には、設立一年後の大規模な集会が開催されたことが、日本人団員によって描写されている。

We had a happy big rally of a hundred girl Guides at the YWCA on May 27. It was a very fine day in the beginning of summer, and the rally was given by the 1st, 2nd, and 3rd Tokyo G. G. and Yokohama Brownies. . . . The rally was begun by our marching into the hall, and a nice speech by Mr. Yamada; then we went on according to the programme. . . . No. II, the first aid, the changing of sheets, and the cooking for a sick Brownie — this was done so beautifully by 1st, 2nd and 3rd Tokyo girls together. . . . [T]he end part of the rally, our Commissioner, Mrs. Buncombe said an interesting speech about our 1st Tokyo G. G. (*The Guide*, September 9, 1922: 325)

1925年時点でガールガイド団体の数は、東京に5団、大阪や神戸を含むその他の日本国内には8団、さらに「満州」（日本統治下にあった中国北東部

の旧地名)に2団が活動していた。これらの組織はイギリス人のアングリカン教会の宣教師によって設立され、日本人団員は全体で約250名が存在し、女たちのほとんどがキリスト教系の学校の生徒で、年齢は12～16歳の女子から成り、上中流家庭の子女であった(矢口133-36)。

1923年、日本におけるガールスカウトの全国組織「日本女子補導団」が、主にボーイスカウト日本連盟のスタッフからなる助言機関をともなって設立された。その頃の『ザ・ガイド』には、「日本から世界中のガイドたちへの手紙」と題して、次のような日英のガールスカウトの間での頻繁な交流があったことを示す書簡が残されている。

Guides of Hampshire, Thank you just ever so much for sending us *The Guides* every week. We are poor, and we appreciate that very much. Guides of St. James, Norlands, Notting Hill, Mildenhall, and Oxford, I can never tell you how much these sisters of yours love your letters. . . . I am sending a few photographs of girls, which I hope you will see in our paper . . . I am looking forward to seeing many of you very soon now. (*The Guide*, September 9, 1922: 325)

以上、日本でのガールスカウト運動は、イギリスからの宣教師たちによって導入され影響を受けてきたと理解できる。しかしながら、1920年代半ば以降は、イギリスのガールガイド組織との交流に代わって、アメリカの「ガールスカウト連盟」(Girl Scouts of USA, 略称GS-USA)との交流が顕著になってくる。この活発な交流を証明するために、「日本女子補導団」の機関誌『日本女子補導団々報』から幾つかを引用することができ、下記のようにその要点のみを記す。

1926年の機関誌では、

「アメリカガールスカウトの団員が昨年（イギリス）での世界大会に参加して以来、熱心に活動している」（『日本女子補導団々報』（1926年）第1号：9）。

1927年の機関誌では、

「1926年5月11～17日に、日本からニューヨーク州ハドソン河岸で開催された第二回世界キャンプに参加した」（『日本女子補導団々報』（1927年）第2号：10-11）。

1928年の機関誌では、

「アメリカガールスカウト連盟からの要請に応じて、日本女子補導団は、彼らに日本の伝統的な人形を贈り、そのお返しに、アメリカの団体からアメリカ人形を贈られた」（『日本女子補導団々報』（1928年）第3号：3）。

1929年の機関誌では、

「アメリカガールスカウト連盟創設者ジュリエット・ゴードン・ロー夫人についての長文のエッセイを掲載して、アメリカガールスカウト運動を詳細に紹介している」（『日本女子補導団々報』（1929年）第4号：23-26）。

1930年の機関誌では、

「紐育のラヂオ放送に関して、アメリカガールスカウト連盟からの要請に応じ、日本女子補導団が彼らの活動についての完全な情報を直ちにアメリカのガールスカウト団体に送った」（『日本女子補導団々報』（1934年）第9号：10）。

GS-USAの年次報告書からも、日米ガールスカウトの交流や在日アメリカ人子女たちの活発な活動に関する資料を引用することができる。1923年の年次報告書には、在日アメリカ人子弟が通う学校内に結成されたガールスカウトについての報告がある。

Japan

We are starting out this year with an enrollment of twenty, the largest so far. We have a new captain and lieutenant and are proud to say that a council is being formed to back us up. We are divided in three patrols, the Silver Fox, Elk, and Ermine. Our troop crest is the bamboo which we think appropriate for a troop in Japan. We meet once a week at the only American school there is. We do a lot things if you might think queer. . . . If any scouts of America would like to write us we'll be glad to answer. We are scouts just like you all, and with hikes and work and prospects of another camp we are marching on with all the World to a better, bigger Scouting. Ruth Tenny (*Annual Report* 1923: 21)

1924年（関東大震災の年）の報告書では、

Fire drill in Japan

In Yokohama, Girl Guides find fire brigade knowledge a most necessary thing. One captain writes, "As soon as my girls can do a fireman's knot, pull a person, form a room by a properly tied rope, carry some one of their shoulders, pass buckets and hold a mattress for someone to jump, I take them to a fire station where they learn how to (sic) work fire hoses, join them on the road,

etc.” (*Annual Report* 1924: 25)

1925年の報告書では、

From Japan

Dear American Girl Scout: Greetings and best wishes to you from the Japanese Girl Guides. WE thank you very much for your kind thoughts and interests about us and our work. WE are very grateful about your help in giving us those interesting magazines every month. With many thanks and good will. Yours cordially, Shiba, Tokyo, Japan Moto Arahata (*Annual Report* 1925: 22)

1930年の報告書では、

A reception in Japan

Greets the doll messengers of a friendship

“This passport introduces to you Rose Mary Baltimore, Girl Scout of Troop Twenty-four, a loyal and low-abiding citizen of the united states, who goes to visit to Japan as a Messenger of Friendship and to see the Hina Matsuri, March 3, 1927. . . .” With such passports under their arms Rose Mary, and all the dozens of her fellow dolls, docked at Yokohama last spring, and were greeted by no less than the American Ambassador, the Japanese Foreign Minister and the Grand Old Man of Japan, Viscount Shibysawa (sic) (*Annual Report* 1930: 53)

以上の各文書は、同報告書のなかに書かれた海外のガールスカウトについての他の多くの文書とともに、GS-USAが日本のガールスカウト団体と頻繁

に緊密な交流をあったことを証明するものである。にもかかわらず、今まで研究者は、年次報告書の中のこれらの文書に関心を示してこなかった。

II

日米ガールスカウトの交流の背景には、太平洋間の交通・通信網の整備があった。1898年に雑誌『北米評論』(*North American Review*)に掲載された「アジアにおけるアメリカの機会」(“America’s Opportunity in Asia”)と題するエッセイは、アメリカの顔は常に大西洋に常に向けられるという従来の見方は、今日のアメリカにはもはや当てはまらないと論じ、その理由として、アジア・アメリカ両世界における変化、両世界の間を結ぶ航海の便数と時間の短縮を指摘している。

Asia is more accessible to-day than Europe thirty years ago. In 1885 there was but one line steamer from America to Japan, now there are six, crowded with passengers and weighted down with freight. Twelve years ago the writer made the voyage from San Francisco to Yokohama in twenty-two days; this year he has crossed the same ocean in less than twelve. (Denby 32)

当時、日本の最大の船舶会社の日本郵船は、ホノルル及び日本の数カ所の港を経由するシアトル・香港間の定期航路を開設させ、1901年以降は太平洋を毎週6往復した。それに続いて、東京郵船や大阪郵船も太平洋の定期航路を開業し、その結果、横浜・サンフランシスコ間は、19世紀末に12日間もかからなくなっていた。また、サンフランシスコ、グアム、フィリピンを結び、そこから日本と中国まで繋ぐ太平洋商業用海底電線会社による海底電線ルートの建設が着工され、1903年にビジネスを開始した。この時期に、大

型船舶による安全航海、電信網の発達など東アジアとアメリカを結ぶ人物、情報のネットワークが形成されつつあったのである（浅原、「第4章—航路確立の時代」95-114）。

こうした太平洋間の交通・通信網の整備を受けて、20世紀初め、『世界のアメリカ化、または20世紀の潮流』（*The Americanization of the World, or, the Trend of the Twentieth Century*）と題する著作が刊行された。この本のなかで、著者の英国人ジャーナリストW・トマス・ステッド（W. Thomas Stead）は、「アジア」という1章を設けて次のように記した。

The Americans have . . . only just begun to declare that the frontiers of the United States extend to the coastline to of her enemies and rivals. . . [T]hey have now boldly plunged across the wide Pacific, and have established themselves off the Asiatic coast. Their advance across that ocean has been very rapid. It began without any notion on the part of the American people of what was going to happen. (Stead 199-200)

彼はアメリカ化に関して、サモアとハワイから書き始め、それからフィリピン、中国、朝鮮半島、日本について、同時代人の眼を通じて観察した。これらの地域の政治・社会的な状況は異なるが（アメリカ支配下のフィリピン、社会経済的な改革の最中であった中国、日本の帝国主義的な支配による朝鮮半島）、アメリカ植民地下のフィリピンの場合はいうまでもなく、中国の場合も同様であり、上海は中国のなかで最もアメリカ化された都市であった。朝鮮でもアメリカ文化の影響を受け、ハリウッド映画は朝鮮半島のほとんどのに及び、ソウルはジャズ音楽の都市であり、ピョンヤンにおいてさえ、キリスト教宣教師の活動が行われていた（成田 187-88）。

日本社会のアメリカ化も、東アジア全体のこうした状況の中に位置づけな

なければならない。この国の場合は、1910年代から1920年代にいたる時期にアメリカ文化の影響を著しく受けることになる、東京や大阪では郊外が拡大し主要なターミナル駅には次々と百貨店がつくられ、中間層を指す表現として「サラリーマン」という言葉が定着する。また、ハリウッド映画と日本映画が、全国に出現した何百もの映画館で上映され、多くの観客を引きつけた。レコードプレーヤーとジャズ、モダン・ボーイやモダン・ガールのファッション、野球のようなスポーツが都会の日常に浸透していく。こうしたなかで、今や「アメリカ的ではない日本がどこにあるか。アメリカを離れて日本は存在するか。アメリカ的でない生活が我々のどこに残っているか」と批評家は語った。この文化と社会は1920年代米国の大都市での大衆消費社会を想起させるものであり、と同時に、この現象は、ヨーロッパ流のフロックコートとシルクハットから米国流のモーニングトソフト帽に男子の正装が変わったと説明されるように、日本におけるイギリスのようなヨーロッパ文化からアメリカ文化への関心の移行でもあった（ゴードン 上巻 327, 329；吉見『親米と反米—戦後日本の政治的無意識』48-49）。

著者ステッドは続けて、アメリカはやがて普遍的な教育という伝統に大きく依拠して世界を支配するであろうと言う。

A whole volume might be written in comparing and contrasting the educational systems of Great Britain and the United States. . . American superiority, as attested by statistics, has its root in one fundamental difference between two nations. In America everybody, from the richest to the poorest, considers that education is a boon, a necessity of life, and the more education they get the better it is for the whole country. (Stead 386-87)

そして、宣教師のおかげでアメリカがその教育の伝統を海外まで拡大している事実を、当時のオスマントルコ帝国領アルメニアでの例を引いて強調している。

[I]n the confines of Turkish Armenia, Armenian patriarch spread him a map of Asia Minor which was marked all over with American colleges, American churches, American schools, and American missions. They are busy everywhere, begetting new life in those Asiatic races. They stick to their Bible and their spelling-book, but every year an increasing number of Armenians and other Orientals issue from the American schools familiar with the principles of the principles of Declaration of Independence and the fundamental doctrines of the American Constitutions. (Stead 191)

1899年に、海外のアメリカ人宣教師数は3,478名であり、同じく海外にいるイギリス人宣教師数は依然としてそれ以上の5,393名であったが、しかし次第に前者の数が急増する地域を見出すことができなかもアジアでの彼らの宣教および教育活動が拡大するのである(ティレル 164-65)。

ボーイスカウト、ガールスカウトという青少年教育はともに、この「教育」の範疇に属するものであると捉えられるであろう。ということは、両方のスカウト運動が、アメリカ化の波にのって東アジアに運ばれ、そして、アメリカの宣教活動と連動してこの広いアジアに伝達したのであり、日本におけるガールスカウトもその一部であった。以上のことから、日本におけるこのガールスカウト活動の受容とそれに続く同活動の普及は、日本の都市生活における広範囲のアメリカ化を反映したものと理解することができよう。

ところで、両スカウト運動は、日米ともに都市化・工業化によって生じた

諸問題を解決する多様な社会改革である革新主義運動の一つであった。両国において、ボーイスカウトとガールスカウトは革新主義の時代における社会問題に対応するものであった。革新主義の意味は広範なものであるが、本稿は、20世紀初めアメリカで広がったボランティア組織運動の一つである社会的な革新主義改革としてこのスカウト運動について論じる。

20世紀初めのアメリカ社会では、都市化・工業化に加えて移民の大量流入によっても、急速かつ激しい社会変化が都市生活に生じ、それが男女ともに思春期の子どもたちの生活にも影響を与えるようになった。社会改革として、貧民家庭の子どもに対して児童労働の廃止、隣保館運動、少年非行対策などがとられたが、中産階層の子どもを対象にしたのがボーイスカウトやガールスカウト運動であった。男子は父や祖父の代と比べると、「母親の過保護によって甘やかされ…、都市生活によって墮落して」、その結果「軟弱になるとともに、自己抑制が効かなくなってしまうように思えたのである。アメリカボーイスカウト連盟のリーダーであったアーネスト・T・シートン(Ernest Thompson Seton)は、1800年代初めアメリカの少年は皆、健全で国家にとって有用であったこと述べた後、それと対比させて同時代の都市化・産業化による子どもへの悪影響についての具体的描写が続く。

[They] could ride, shoot, skate, run, swim; he was handy boy with tools, . . . he was physically strong, self-reliant, resourceful. . . . He was altogether the best material of which a nation could be made. . . .

Many Americans . . . degenerate. We know money grubbing, machine politics, degrading sports, cigarettes, . . . false ideals, moral laxity and lessening church power, in a word "City rot" has worked evil in the nation. . . . [Seton blamed urban growth, industrialization, and the rise of spectator sports for turning]

such a large proportion of our robust, manly, self-reliant boyhood into a lot of flat-chested cigarette-smokers, with shaky nerves and doubtful vitality. (Macleod 32, 49, 52)

こうした問題への対処として、少年事業家たちは、少年たちを大人に依存させつつ活発に行動させるために、きちんとした監督下でのレクリエーション活動を提案し、その一つがボーイスカウトによるキャンプ活動を中心とする野外教育であった。

中産階級の女子は、男子ほど、組織的な教育上の関心を引き起こさなかった。というのも、彼女たちの方が親の監督に従順であり、平均して学校に男子よりも長く在籍し、どの階層の女子も街の通りで放浪することが男子より少なかった。後に、女子のための新たな社会改革が実施されるようになると、その運動関係者は、女子が大人の監督から逃れようとしているとは言わず、むしろ、自らに与えられた立場に不満であり、そのために「神經過敏、憂鬱、興奮といった気分になりやすい」と述べた。こうした状況の中で、男子と同様に夏のキャンプ活動を中心とする女子の社会教育団体—「ガールスカウト」、「キャンプファイア・ガールズ (Campfire Girls)」(当時、ガールスカウトと並ぶ大規模な女子の社会教育団体)、「ガールズ・パイオニア (Girls' Pioneer)」—などが設立された (Mints 194-95)。

確かに、多くの少女は、制服や野外活動を中心とするスカウト活動のような、少年文化に魅了されてはいた。例えば、イギリスのガールガイドとは違い、アメリカの少女たちは、危険と勇敢さの意味を含めて(ボーイスカウトからの激しい反対を乗り越えて)ガールスカウトという名称をつけた。しかしながら、ガールスカウトも「キャンプファイア・ガールズ」のいずれも、ボーイスカウトとは教育指針において、根本的に異なっていた。アメリカでのガールスカウトの創始者ジュリエット・ロー (Juliette Low) は、西部開拓者であった自身の曾祖母がインディアンに捕らわれても生き残った事実

を、キャンプファイアを囲んで座った少女たちに話をし、西部開拓者家族の母親像を理想とするように語りかけた。こうした説明によって家族を支える強靭さと勇気と自信を持つが、決して社会的な場で男と競争することを理想とはしなかった。過激な婦人参政権運動家や強固な婦人解放論者とは根本的に異なり、現代から見れば矛盾するように思えるが、ガールスカウトの規約に書かれた第一は「女性らしくあれ」で、その第二は「強くあれ」であり、この規約は、新たな世紀に生きる女性に対して変化する期待を示唆する女性らしさと人間としての強さの融合を意味するものであった (Rothschild 117)。

教育や福祉における革新主義も、政府による社会政策や行政面における革新主義の場合と同様に日本に伝えられた。例えば、教育家ジョン・デューイ (John Dewey) は1919年に、産児制限運動家マーガレット・サンガー (Margaret Sanger) は1922年に、社会事業家ジェーン・アダムズ (Jane Addams) は1923年にそれぞれ来日し、各専門分野で日本社会に影響を与えた。彼らの革新主義運動は、20世紀初めの広義の「教育」の場合における日本のアメリカ化を象徴するものであった言うことができ、同時期に日本に伝えられたYWCAに関しても同様なことが言えるであろう。ボーイスカウト運動とYMCAの関係と同様に、ガールスカウト運動指導者にYWCA関係者が加わり、またスカウト活動の場所がYWCAの建物であったことが明らかにされた前述のように、YWCAが米国ガールスカウトの歴史における果たした役割に注目しなければならない。日本YWCA史の文献から引用できるように、日本YWCA組織は、アメリカYWCA宣教師と米国留学経験のある日本人の女性キリスト教徒たちによって設立された (日本YWCA 100年史編集委員会、「第1部—20世紀と共に日本YWCAは誕生した (1905-1936)」1-35)。

以上のことから、次のことが言える。日本のガールスカウトはイギリスのスカウトの産物ではあったが、この女子の社会教育組織はアメリカからの輸

人物であったYWCAでスカウト活動を行なった。そして日本国内の各ガールスカウトは、YWCAを通じて互いに連絡を取り合いかつ統合した。従って、日本YWCAの中のガールスカウト団体は、アメリカ化の典型的な事例であると論じることができよう。この議論を補強する上で、「ダルトン・プラン」や「プロジェクト・メソッド」など日本のガールスカウトによって採り入れられた教育方法もまた、20世紀初めのアメリカにおいて考案され普及した事実を指摘できよう。日本のガールスカウトとGS-USAとの間の交流は、ガールスカウト組織関係者や贈り物の太平洋を越えた双方向的な横断が示すように、積極的に実施された。その結果、日本のガールスカウトは革新主義運動の太平洋を越えたその一部になったと言えよう。この事実は、日本女子補導団やGS-USAに関する前述に引用した史料からの引用した文章によって論証された。

これまで、日本のガールスカウトはアメリカのYWCAの影響を受け交流を続けたことを論じてきたが、しかし、必ずしも前者は後者の完全な模倣ではなかった。ボーイスカウトと同様に、前者には日本の長く続いた子ども会の伝統があり、それがスカウト形成に貢献したことなどがあげられる。従って、日本のガールスカウトはアメリカのガールスカウトを土着化させ作り直そうとしたと言えよう（Fujimoto, “Transpacific Boy Scout Movement in the Early 20th Century” 36）。にもかかわらず、アメリカの文化的社会的な覇権は東京のガールスカウト組織の中に植え込まれた。換言すれば、この女子の社会教育活動は、1910～1920年代における広範囲な日本のアメリカ化の多くの側面の一つであったのである。さらに、この教育運動は、太平洋を越えた革新主義運動に含まれるものであった。結果的に、ガールスカウト運動は、スカウト関係者の双方向的な往来を通じての太平洋間の社会運動になった。

しかし、アメリカの革新主義運動との相互交流は長くは続かなかった。1930年代になると、日本国内の軍国主義化が進む政治状況の中で、このボ

ランティア組織であるガールスカウト団体は他の社会教育組織と同様に軍事組織の一つに、強制的に組み込まれていくのである。そして、GS-USA との間の交流は、日米関係の悪化の結果、最終的に停止することになる。東京そして全国のガールスカウトはアメリカのガールスカウトをモデルとすることから離れ、やがて太平洋戦争の中で、日本のガールスカウトである女子補導団は解散させられた。それは、敵国アメリカの影響下につくられた、その敵国の青年女子教育運動であったからにはほかならなかった（矢口 296）。

結論

かつて、歴史家 D・T・ロジャーズ（Daniel T. Rogers）はその著書『大西洋横断—革新主義時代における社会と政治』（*Atlantic Crossings: Social Politics in a Progressive Age*）のなかで、アメリカ革新主義運動の歴史を、大西洋を越えたヨーロッパでの同運動との連動において論じた（1-7）。しかしながら、アメリカの革新主義運動は環大西洋世界を越えたものであることが、本稿によって明らかになった。すなわち、それは環太平洋的な運動でもあった。このことは、革新主義運動の一つであったガールスカウトを例として、日米ガールスカウトの双方向的な交流が存在したことが論証されたことによって示された。

アメリカ化とそれが日本のガールスカウトに与えた影響には、どのような歴史的な意義づけができるであろうか。このようなアメリカ化に関して、それは「文化帝国主義」であり、そしてこの「文化帝国主義」を一理論として限界がある、と解釈する向きがある。しかしながら、この理論では、アメリカが発展途上国に対してそれ自身の文化を強制していたとは解釈されていないことを認識しなければならない。それよりもむしろこの理論が焦点を当てるのは、一つの矛盾—資本、情報、もののイメージの自由な循環が、そのような自由とは対立するかのように見える帝国主義的な文化支配を生んだ—で

ある。このことは、1920～40年代の間の日本の植民地支配下にあった東アジアの民衆に対して日本の文化や習慣を押しつけた国策とは全く異なるものであったと言えよう（吉見、「グローバリゼーションとアメリカン・ヘゲモニー」63-64）。

注

本稿は、下記の学会発表原稿を大幅に加筆修正したものである。Shigeo Fujimoto. "Transpacific Girl Scouts Movement and Americanization in the Early 20th Century: The Case of the Girl Scouts Organization, Japan." The International Conference of American Studies Association of Korea. Seoul National University, Seoul. September 21-22, 2012. Conference Presentation.

Works Cited

Primary Sources

- Denby, Charles Jr. "America's Opportunity in Asia." *North American Review* 166 (1898): 32-40.
- The Girl Guiding UK. *The Guide*, August 6, 1921; *The Guide*, September 9, 1922.
- The Girl Scouts of the USA. *Annual Report*, 1923, 1924, 1925, 1930.
- Stead, W. Thomas. *The Americanization of the World, or, the Trend of the Twentieth Century*. New York: Horace Markley, 1902.
- 日本女子補導団。『日本女子補導団々報』（1926年）第1号；同（1927年）第2号；同（1928年）第3号；同（1929年）第4号；同（1934年）第9号。

Secondary Sources

- Fujimoto, Shigeo. "Transpacific Boy Scouts Movement in the Early 20th Century: The Case of the Boy Scouts Organization in Osaka, Japan." *Australasian Journal of American Studies* 27 (2008): 29-43.
- "Early 20th-Century Americanization and the Boy Scouts Movement in East Asia." The World Congress 2009 of International American Studies Association. Beijing Foreign Studies University, Beijing. September 17-20, 2009. Conference Presentation
- Macleod, David. *The Age of the Child: Children in America, 1890-1920*. New York: Twayne, 1998.

- Mints, Steven. *Huck's Raft: A History of American Childhood*. Cambridge, MA: Harvard UP, 2004.
- Nelson, Block R., and Tammy M. Proctor, eds. *Scouting Frontiers: Youth and the Scout Movement's First Century*. Newcastle: Cambridge Scholars, 2009.
- Rodgers, Daniel T. *Atlantic Crossings: Social Politics in a Progressive Age*. Cambridge, MA: Harvard UP, 2004.
- Rothschild, Mary Aickin. "To Scout or To Guide?: The Girl Scout-Boy Scout Controversy, 1912-1941." *Frontiers* 6 (1982): 115-121.
- 浅原丈平『日本海運発展史』東京：潮流社，1978年。
- 井野瀬久美恵『子どもたちの大英帝国』東京：中央公論新社，1992年。
- ゴードン，アンドルー『日本の200年—徳川時代から現代まで』森谷文昭訳，2巻，東京：みすず書房，2006年。
- ティレル，イアン『トランスナショナル・ネーション アメリカ合衆国の歴史』藤本茂生他訳，東京：明石書店，2010年。
- 成田龍一『シリーズ日本近現代史4—大正デモクラシー』東京：岩波書店，2007年。
- 日本YWCA 100年史編集委員会『日本YWCA 100年史—女性の自立を求めて1905-2005』東京：日本キリスト教女子青年会，2005年。
- 藤本茂生編集・解説『ボーイスカウトとガールスカウト運動の誕生（第1回：英国の初期文献・資料集成）』全4巻＋別冊，東京：Eureca Press，2012年。
- 矢口徹也『女子補導団—日本のガールスカウト前史』東京：成文堂，2008年。
- 吉見俊哉「グローバリゼーションとアメリカン・ヘゲモニー」テッサ・モーリス＝スズキ，吉見俊哉編『グローバリゼーションの文化政治』東京：平凡社，2004年，34-85。
- 『親米と反米—戦後日本の政治的無意識』東京：岩波書店，2007年。